YAH!

12月は『寒椿』

You Ain't Heard Nothin' Yet！　ヤー！

Vol.43　2022.12.10　えんじょい工房・『YAH!』編集室

不思議な空間

ある業界の、主にメーカーを集めた大規模な展示会というものに行ってみた。出展社側の応援ということで一応仕事なのだが“店番”であって、二日間ただただ時間の経過するのを待つばかりで、申し訳ないくらい役にはたっていないだろう。

何処もここも変わり映えしないブースの羅列である。目立たなくてはいけないが、突出すると浮いてしまう、かえって敬遠されてしまうことにもなりかねない。スタッフがパンフレットを手配りし、客に商品の説明をする。とにかく“表現・アピール”というものは難しい。費用対効果はあくまでも言い訳だが、注目度が高ければ宜しいというものでもなく、引き合い、受注につながらなければ意味がない。展示のための展示であってはならない。

出展社及びその有力な得意先のために用意されたＶＩＰルーム、ここで商談は進むのだろう…ここはかなりの盛況ぶりで、といってもただただ寛いでいる、いやたんに休憩しているというった雰囲気で、或いはパソコン開いてなにやら仕事らしきことに集中している個人がほとんど、こちらもサービスのコーヒーをいただき、のんびりして時間の経過を稼いだ。

【こんな唄に出くわした】

ひとり泣く夜のワルツ

作詞：矢野 亮
作曲：吉田矢 健治
歌　：江利チエミ

花が咲いても 淋しくて
花が散ったら なお悲し
誰が私を こうさせた
夜が 夜が泣かせるの

好きと何度も 書いた文字
いつか涙で 溶けてゆく
どうせ貴方にゃ とどかない
夜が 夜が泣かせるの

発売は２００８年、江利チエミさんといえば没年月日１９８２年２月１３日（四五歳没）だということだから、亡くなった後に発売されたようで、これが“昭和の沁みる唄”であることに間違いはないようだ。サザエさんも、シンガーとしても、そして“悲劇”のヒロインとしてのイメージも全て彼女なのだが、それぞれが時系列上際立っていて、実に歴史的な存在であった。これはどうしたことか？明るさも、おかしさも、悲しみも兼ね合わせて持っていた、「おかしゅうて、やがて哀しき…それでもやはりハッピーエンド」、実にアメリカ映画的な人であったと個人的には思っているが、ただし、“ハッピーエンド”であったかどうか、傍から見れば「そうではなかろう」というところだが、それは本人のみぞ知る…である。

【今月の花　十二月・師走】

寒椿

墓地の入り口に咲く山茶花、菩提寺の境内に咲く寒椿。あくまでも個人的な“景色”なのだが、その違いはともかく、いずれも何となく泣ける（演歌的に？）花である…

【こんな映画を観てきた】

『ミスター・アーサー』arthur　−1981／米　監督：スティーブ・ゴードン

莫大な遺産相続を棒にふって愛する女性の許に走る放蕩息子を描くラブ・コメディ。よくあるお話ではある。

ニューヨークの大富豪の御曹子アーサー・バック（ダドリー・ムーア）は、父親の言いつけに従って、ある大富豪の娘との結婚をとって巨額な財産相続権を譲り受けるのか、それとも夢を抱いて明るく生きるリンダ（ライザ・ミネリ）への愛をとって無一文になるのか、果たして…

結局のところ、万事まるくおさまって、何一つ欠けることなく主人公の〝利益〟は確保されるという、いかにもアメリカ的なハッピーエンドではあった。都合がよすぎるとも思えるが、あくまでもファンタジーとあれば、これ以外の結末はないのだろう。これが欧州特にフランス映画などであったとしたら、こうしたエンディングにはならなかったろう、何かを犠牲にしたり、失ったり、どこかしらに悲劇の余韻を残したはずだ。もちろんどちらもそれぞれである。この作品で、忠義で教養ある執事のホブスンを演じたジョン・ギールグッドが第54回アカデミー賞の助演男優賞（1982年）を受賞したことは、まことに目出度く、『オリエント急行殺人事件』では不完全燃焼だったが、朗報であった。